

102 明治12年6月22日 菊池長閑宛

第八号 明十二
六月廿二日 (長閑注記)

第四号 (四月三十日付五月十六日横浜出) 去る十四日に達セリ
河上英国(エ)渡海に付田中稻城君を経て文通あるへき旨委細承
知したり去共先便例の書状袋送上たれハ平生の便りハ田中氏を

煩さず共出来るへし其旨同人エも私より申越置たり英磨君か大
隈参議の養子と成たる義ハ同君よりの文通にても承り驚入たり
那珂先生卒中にて逝去の旨河上より通達あり実に愁傷之事共な
り私帰朝迄ハ迎も病死杯と云事ある間敷と存居たるに不意の辞
世とハ甚た残り多し今後家内ハ如何成行へきや於波も大事の世
話人を失ひ力を落居へくと察す思出セハ私十歳か十一歳の時初
て先生に見江し以来直に書物を教られたる事こそなければ父の如
慈愛を受師の恩顧を蒙(り)る事十五六年も一日の如く更に変り
す所を見られたらんに惜いと云も余りあり且又先生出奔中南部
家の或家老か用人を刺殺す為密かに帰国なしたる時を初とし首
謀の逆臣とて横手エ呼出されたる折も父君か懸り合はれたる事
あり昨年於波一件に至まで種々両家の間に不思議の縁ありたる
ハ珍敷事なり当地ハ今迫涼い所か寒い位なりしか昨日より暑気
催したり七月ハ例の通り田舎に引込避暑仕へくと存す未タ何処
エ参るか分らず当国運送の便りよきハ今知たる事ならね共去る
十九日夕飯後七時の蒸氣車に乗り九時に「ニウ、ヨルク」通ひ
の夜蒸氣船に乘移り緩々眠て翌朝七時に「ニウ、ヨルク」府に
着欧羅巴に赴く友達と一日談し夕六時の船に乗昨朝七時半に帰
宅セリ道法百里船車賃一弗(片道)何と調法の上安いと思はれ
ぬか

尊父君

武夫拝

政国より文通ありたれ共此度ハ返書に及兼

(長閑注記)

「八月六日達

同廿九日此方八号ヲ以返事」